

國學院大學學術情報リポジトリ

「完璧な紳士」ジョージ・ケンプ：
サマセット・モーム『お菓子とビール』についての一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤野, 敬介, Fujino, Keisuke メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000737

「完璧な紳士」 ジョージ・ケンプ — サマセット・モーム 『お菓子とビール』 に ついての一考察 —

藤野敬介

I

ウィリアム・サマセット・モーム (William Somerset Maugham : 1874-1965) の円熟期の代表作の一つである『お菓子とビール』 (*Cakes and Ale* : 1930) は、語り手である「私」(ウィリアム (ウィリー)・アシェンデン (William “Willie” Ashenden)) が、この物語のヒロインであるロウジー (Rosie) にこう訊ねる場面で終わっている。

「あなたが好きだったのは、結局彼だけだったような気がするんですけどね。どうです？」
「そうかもしれないわ」
「彼のどこがよかったのでしょうか？」 (『お菓子とビール』 307)

この質問に対するロウジーの答えは、「どこがいいって、あの人はいつだって完璧な紳士だったわ (I'll tell you. He was always such a perfect gentleman.)」というものであって、これがこの小説の最後の一文となっている。(308)

ここで彼女が言及している「あの人」とは、ジョージ・ケンプ (George Kemp) のことである。彼は、「私」が子供の頃、育ての親である叔父夫婦とともに住んでいた英国ケント州の海沿いの小さな町ブラックスタブル (Blackstable) の名物男で、石炭職人であったが不動産にも手を出し、石炭運搬会社への投資も行う山師的な人物である。地元では“Lord George”の綽名で通っていたが、これは、彼が貴族的な背景を持っていたということではなく、いつも偉そうな態度をとっていることを皮肉ってつけられたものであった。(本稿では“Lord George”を「ジョージの旦那」と訳すことにするが、引用内は、採用した行方昭夫訳に忠実に「ジョージ殿」としてある)

ロウジーとジョージは、彼女の最初の夫で後に英国を代表する作家となるエド

ワード (テッド)・ドリッフィールド (Edward “Ted” Driffield) と知り合う前からの恋人同士であり、彼女がエドワードの子供を妊娠して結婚した後も、秘かに関係が続いていた。その間、放縦で淫奔なロウジーは、「私」を含めた多くの男性と不貞を働くが、最後はジョージと二人でアメリカに駆け落ちして夫婦となった。「私」が「あなたが好きだったのは、結局彼だけだったような気がするんですけどね」と言っているのは、こうした経緯を踏まえてのことであり、彼女もそのことを素直に認めている。(307)

ロウジーがジョージに好意を寄せていたことには何ら問題はないのであるが、その理由として「あの人はいつだって完璧な紳士だったわ」と彼女が断言したことについては、筆者も含めた多くのモーム作品の愛読者、研究者が戸惑いを感じずにはいられなかったはずだ。なぜなら、ジョージの旦那という人物からは、「私」に代表される物語世界の中のイギリス人の多くが抱いていたであろう「紳士」のイメージが、全く浮かんでこないからである。それにもかかわらず、作者モームがロウジーにこの台詞をあえて口にさせ、それを締めくくりにしたのには、彼なりの意図があったと考えられる。

本稿では、作中の登場人物たちの台詞や描写から読み取れる、当時のイギリスにおける一般的な紳士像と、ロウジーがジョージの中に見出した「完璧な紳士」像とを比較することで、モームの真意を探ることを目的とした。

Ⅱ

まずは、このラストシーンに至るまでの物語の流れを、ロウジーとジョージを中心に振り返ってみることにする。

語り手である「私」が、二十年来の友人であり作家仲間でもあるアルロイ (ロイ)・キア (Alroy “Roy” Kear) から連絡を受け、彼と面会するところから物語は始まる。ロイは、最近長逝した文豪エドワード・ドリッフィールドの伝記を書くことになったのだが、彼が前妻ロウジーと暮らしていた頃のことをよく知らず、無名時代のドリッフィールド夫妻を知っている「私」に協力を求める。ロイの背後にはドリッフィールドの後妻で未亡人のエイミー (Amy Driffield) がいるらしく、「私」はロイと一緒に彼女がエドワードと暮らしていたブラックスタブルの邸宅を訪問することになる。そこで分かったことは、二人はロウジーを好意的には捉えておらず、彼女を発端としてドリッフィールドの名誉や名声に傷がつくことをひどく恐れているということであった。そこで先手を打ち、「私」に当時の二人に関する資料を提供させることで、「私」がドリッフィールドの伝記を書いてその事実を暴くことを防ごうとしたのである。しかし、そもそも作家としてのエドワードに興味を持っていなかった「私」には、はじめからその意図はなく、二人の依頼を快諾し、資料を持って未亡人宅を再訪することになる。

そして、これをきっかけに、「私」は過去を追想するようになる。15歳の夏、休暇中にブラックスタブルに帰省していた「私」は、自転車に乗る練習をしている最中にドリッフィールド夫妻と知り合う。狭い田舎町のこと、地元教区の牧師の甥っ子である「私」が夫妻と一緒にいたことは、すぐに叔父と叔母の耳に入り、二人との付き合いを禁じられる。その理由について叔父は話してはくれなかったが、牧師館に長年勤めるメイドで事情通のメアリ・アン (Mary-Ann) の言うところによると、仕事を転々とした後に今は作家を名乗っているエドワードはもちろんのこと、彼の妻ロウジーの評判が良くないせいであるらしい。ロウジーは、旧姓をガン (Gann) といい、メアリ・アンとは幼馴染であった。成長してからは、地元の庶民向けの酒場「鉄道紋章亭」(The Railway Arms) でバーメイドとして働いていたロウジーであったが、客の誰とでも関係するという噂が流れ、それに加えて、たまたま店に立ち寄った既婚者のジョージと親密すぎる仲になったことで店を追い出されたのだという。

「私」は、自分と同じ年頃の息子を持つジョージの旦那が若いロウジーと恋愛関係にあり、鉄道紋章亭をくびになった彼女を、近隣の町ハヴァシャム (Haversham) の「皇太子羽亭」(The Prince of Wales's Feathers) に紹介し、その店に毎晩馬車で乗り付けるのだというメアリ・アンの話をはじめは信じていなかったが、牧師館にメアリ・アンを訪ねてきたロウジーがジョージと違い引きする現場を目撃して、それが事実であることを知りショックを受ける。

それでも、「私」はドリッフィールド夫妻と不思議と気が合い、帰省するたびにこの二人と行動を共にするようになったが、クリスマス休暇の折、たまたまドリッフィールド宅に居合わせたジョージの旦那と鉢合わせになる。彼は、「尖った顎髭の小太りの男で、血色がよく、赤ら顔で負けん気らしい青い目」をしている、「昔のオランダ絵画でよく見る、赤ら顔の陽気な商人そっくり」な男で、洒落者ではあったが、その身なりは派手で、声は馬鹿でかく、見栄っ張りで自慢好きだった。誰に対しても、親しみやすいというよりは馴れなれしい態度をとり、ビジネスでもコミュニティでも常に自らを中心に置こうとする彼は、町の「紳士階級」の人々からは下品な男として軽蔑されていた。(89-90) ところが「私」は、ジョージのことを知れば知るほど、彼のことが好きになってしまう。

最初は彼に対してよそよそしくしたり、馬鹿丁寧にしたりしてみたが、向こうが身分の差をまったく気にしないので、こっちが高飛車に出ても無駄だと分かった。彼はいつだって陽気で、元気一杯で、感じよい態度だった。例の品のないやり方で僕をからかい。こちらは高校生らしい機知で言い返す。そこで二人とも笑いだす。次第に彼への偏見がなくなった。(125-6)

ところが、次の復活祭の休暇でブラックスタブルに帰省した「私」に、衝撃の知らせが届く。ドリッフィールド夫妻が方々に借財を残して夜逃げをし、どうやらジョージが裏で糸を引いていたらしいのだ。偶然、大通りで出くわしたジョージの旦那に、「私」が噂の真相を聞いただと、彼は「いかにもびっくりしたような顔」で「目ははずるそうに」光らせながら、自分は何も知らないと言を切るのであった。(136)

その4年後、21歳を手前にロンドンで医学生になっていた「私」は、通りで偶然ロウジーに声をかけられる。そのとき、自分が狼狽して、ひどく赤面していることに気付いたのだが、それは、「誠実ということについて、嘆かわしいほどヴィクトリア朝時代の考え方をしていた」ので、ロウジーが借金を踏み倒しての夜逃げという「恥ずべき事件を知っている人間」に話しかけたことが信じられなかったのである。(179)ところが、彼女は握手の手を差し伸べ、「ブラックスタブルの人に会えて嬉しいわ」とあっけらかんとしている。(179)そのままドリッフィールド宅を訪問することになった「私」は、英国文壇の中で一定の地位を築きはじめていたエドワードにも再会し、土曜日ごとに邸宅で開催されるサロンの常連となる。

ある晩、「私」は芝居の帰り道にロウジーを自分の下宿に誘い、一夜を共にする。それをきっかけに二人は愛人関係になるのだが、彼女との関係は、一年程で突然の終焉を迎える。なんと、彼女がエドワードを棄てて、地元での観光事業に失敗して破産宣告をしたジョージと海外に逃亡したのだ。このとき、事業に出資した多くの町民が財産を失い、彼の妻は一文無しになり、息子二人は父親と同じ石炭業を営んでいたが巻き添えをくった。そして、大損をした出資者の一人でもあるハヴィシヤムのある居酒屋の亭主によって、過去2年に渡りジョージがロウジーと毎週のように会い、彼の経営する居酒屋の二階で夜を共にしていたことが暴露されたことで、「町全体が右往左往の大混乱」に陥った。(250)この件に関してある程度の情報を把握した「私」が、メアリ・アンに「叔父さんは二人が駆け落ちしたと言っているね」と、鎌をかけてみると、彼女は次のように答えるのであった。

そうでしょうともね。だって、結局、あの男ざんすよ。ロウジーが本当に好きだったのは。あいつがちよいと小指を上げさえすれば、どんな相手がいたって、飛んでゆきましただ。(252)

この事件からしばらく経って、「私」はエドワードがロウジーと離婚したことを新聞報道で知る。しかし、事の詳細も含めて、エドワードとも疎遠になってしまった身には、ロウジーに関する情報もほとんど入らなくなってしまった。ただ、彼女の母親のところに、時々、少額の現金がニューヨークにある郵便局の消印が

押された書留便で届いたことから、ロウジーが恐らくはアメリカに住んでいることだけは推測出来たのである。

ロウジー出奔後、エドワードは、文学界の有力なパトロンであり、作家を世に出すことに絶妙の術策をもつバートン・トラッフォード夫人 (Mrs Barton Trafford) の庇護を受け、英国文学史に名を遺す文豪への階段を駆け上っていく。その最中、肺炎にかかり一時は死線をさまよった彼は、医者への勧めもあって田舎に転地療養に赴くが、そのとき付き添いに雇われた看護師エイミーと突然再婚する。

本作品は、フラッシュバックの技法を巧みに用いながら、現在の話（「私」とロイ、エイミー・ドリッフィールド夫人が登場する場面）に過去のエピソードを織り交ぜる構成で書かれているが、現在のドリッフィールド宅で、「私」はエイミーから、ロウジーが10年ほど前にアメリカで亡くなったとジョージの息子から告げられたという話を聞かされる。(285) ところが実際は、ロウジーは死んではおらず、「私」はそのことをロイとエイミーには内緒にしている。

その経緯は、以下のとおりである。自らが手掛ける芝居の演出の仕事でニューヨークに滞在していた「私」は、ローズ・イグルデン (Rose Iggulden) と名を変えていたロウジーから手紙を受け取る。そこには、舞台の報道で「私」がニューヨークにいることを知ったが、是非お会いしたいので、自宅に訪ねに来てくれなしかと書かれていた。ニューヨークから車で30分程のところにあるヨンカーズ (Yonkers) という町にある彼女の自宅に向かうと、そこには外見こそすっかり変わってしまったが、あの魅力的な微笑はそのままのロウジーがいた。

彼女は、少なくとも70歳を超えた年齢にもかかわらず元気潑刺としていて、ロココ趣味を全面に押し出した豪華な部屋に、黒人メイドとともに住んでいた。彼女が語ったところによると、アメリカに渡ってすぐ、ロウジーとジョージは一緒になり、イグルデンと改姓した。ジョージは建築業を営んで成功を取めたが、10年前に亡くなり、彼女の手元には多くの財産が遺された。(どうやら、ジョージ死亡のニュースが誤って彼の息子に伝わり、ロウジーが亡くなったことにされてしまったらしい)

ここから物語は、エドワードと彼が書いた『生命の盃』(The Cup of Life) の話へと展開していくのだが、この小説については後述するので、ここでは触れるだけにしておく。「私」とロウジーの会話は、彼女のボーイフレンドの一人からかかってきた電話で中断されてしまうのだが、それをきっかけに彼女の現在の恋愛の話になり、それが本稿の冒頭で紹介した最後の台詞へとつながっていくのである。

Ⅲ

越川正三は『サマセット・モームの小説群』の中で、ロウジーがジョージを「完璧な紳士」（越川訳では「完全な紳士」）と評した理由が、彼女の感覚と趣味の「低俗さ」にあったのだという持論を展開している。彼はロウジーの件の台詞を引用した後、「ここでは、ジョージを『完全な紳士』だと言うロウジーの低俗な感覚にアシェンデンは同意していない」と主張する。(291) なぜなら、この台詞が発せられる直前に、ロウジーは壁にかけられたジョージの写真に視線を移したのであるが、そこに写っている彼の姿を見た「私」が、「それはまるで、ダービーに出かけるために一張羅を着用に及んだ居酒屋の亭主だった」という感想を抱いたからである。(291) そのような成金趣味丸出しで品性を感じさせない男を「完璧な紳士」として捉えてしまうロウジーの感覚は疑わしいものであり、「つまりモームは、好みの低俗さというロウジーの欠点をアシェンデンにつきつけるところでこの小説を終えているのである」というのが越川の考えである。(291)

さらに越川は、この結末が「一つには天真らんまんと好みの低俗さとが同居する人間という動物の不可解さを語っているし、いま一つは子供の頃から好意をもちつづけてきた女性が得意になって欠点をさらけ出すのを見て語り手が呆気にとられるという喜劇的效果をあげている」と続け、「作者は語り手アシェンデンに天真らんまんの裏を見せた瞬間に幕をおろしているのだ」と締めくくっている。

(292) これはつまり、モームお得意の大どんでん返しがこの作品でも用いられているのだという考えであり、「小説のこの結末は、劇的では素晴らしいと筆者は思う」と述べていることから越川の意図は明らかであろう。

越川は、ジョージを評した語り手の文章と、ロウジーの「完全（完璧）な紳士」という言葉との間の大きな落差が「反語的な効果」を生み出しているとも主張している。(292) 「ロウジーはこの結末に至るまで語り手によってほめられ通じたし、趣味の悪い一張羅を着てめかし込んでいるジョージもまた語り手に好意をもたれていた人物だから」こそ、物語の最後に二人の低俗さを語り手に認識させることによって、その落差が読者をハッとさせる効果を生み出しているというのである。(292) それゆえ、彼は「小説の最後にくる『完全な紳士』ということばの反語的な効果に気付けない読者が多いとしたら、それは半分は作者の責任だと言える」とまで言い切るのである。(292)

しかし、筆者としては「完全（完璧）な紳士」という言葉が「反語的な効果」を生み出しているという点では越川の説に同意するものの、反語の対象については異を唱えたい。「私」によるジョージの写真の描写を読む限りでは、確かに彼は「完全（完璧）な紳士」からは程遠い人物であるように思える。しかし、この描写の真の効果は、このような人物を紳士として認めてしまうロウジーの低俗さ

を明らかにすることではなく、逆に、表面的には紳士からほど遠い姿をしているジョージの内面に、本質的な紳士としての資質や生き様を見て取ることの出来た、ロウジーの感覚の鋭さを浮き彫りにする点にあるのではないかと筆者は考えるからである。言い換えれば、成金趣味のジョージを紳士と呼ぶ反語的な言動からロウジーの低俗さを糾弾しているのではなく、そんなジョージの内面の本質を見定めて、反語的に彼こそが真の紳士であると見破ったロウジーの眼力の確かさを、作者モームは示そうとしているように思えるのである。

筆者は、拙論『サマセット・モーム「お菓子とビール」研究 — ロココの太陽・ロウジー論 —』の中で、モームがこの作品に対して特別な感情を抱いており、その理由としてロウジーのモデルになった、かつての恋人エセルウィン・S・ジョーンズ (Ethelwyn Sylvia Jones, 1883-1948) の存在があったことを挙げたのだが、そうした経緯から考えても、モームが、自らを投影した「私」(＝アシェンデン) がロウジーの低俗さを目の当たりにして幻滅するという結末を用意するとは到底思えないのである。実のところ、ロウジーの低俗さについては作中では折に触れて示されており、物語の最後の舞台であるヨンカーズの彼女の自宅の居間には、「ジェイムズ一世様式」の椅子に「ルイ十五世紀様式の家具」や「ワトー風の廷臣およびその夫人」が描かれた豪勢な蓄音機が置かれていると描写され、そこには部屋の主の趣味の悪さを揶揄するような空気がある。(『お菓子とビール』289) さらには、それに続くロウジー自身の描写も注目に値する。

ロウジーは七〇歳にはなっていた。洒落た袖なしの緑のシフォンのワンピースを着ていた。ダイヤを沢山ちりばめ、四角い襟ぐりで、丈はごく短かった。それがピタリ合う手袋のように体によく合っていた。体つきから見て、ゴムのコルセットをつけているようだった。爪は真赤にマニキュアし、眉毛は抜いて描いていた。でっぴりして、顎は二重になっている。胸元の肌はたっぷり白粉を塗っているけれど赤らんでいるし、顔も赤みを帯びている感じだ。それでも元気いっぱい、健康そうだった。髪は白くなったが、まだ豊かで、刈り上げてパーマをかけていた。若い頃は柔らかい、自然のウェーブがある髪だったが、今はまるで美容院に行ってきたばかりのように人工的な感じに波打っている。この点でずいぶん違った印象を与えた。(290)

この部分だけを切り取れば、「私」が年老いたロウジーの姿に幻滅していると読めなくもないが、「私」はこの直後に、「たった一つ、まったく変わらないのは、微笑で、昔と同様無邪気で、茶目っ気たっぷりであらしかった」と述べているのである。(290)

この場面でもそうであるが、「私」は常にロウジーの微笑と、その微笑の背後

にある彼女の心の美しさに魅了されてきたのであった。ロイとドリッフィールド夫人(エミリー)がロウジーの容姿や生活のだらしなさについて散々こき下ろした際にも、「彼女たちは知らなかったのだ。あの魅力的な微笑を知らなかったのだ」と心の中で繰り返し、「(ロウジーは) そういうことには無関心だった。そんな身なりでも綺麗に見えたよ。心も綺麗だった」と反論している。(281 括弧内は筆者) そんな「私」が、ロウジーが成金趣味のジョージを「紳士」と呼んだ程度でショックを受け、彼女に幻滅を覚えるというのは考え難く、モームがそのような「オチ」のために彼女に最後の台詞を言わせたとは思えないのである。

IV

ならば、改めて問わねばならぬが、ロウジーがジョージを「完璧な紳士」と呼んだ理由は如何なるものであろうか。この問いに対する筆者の考えは、すでに示してある。すなわち、ダンディーな紳士を決めこんでいるが田舎者丸出しで、背伸びしていることを見透かされてしまうジョージではあるが、その内面には真の紳士としての資質があることを、ロウジーは見抜いていたからである。

では、彼女が彼の中に見出した「真の紳士像」とはいかなるものであろうか。それを明らかにする前に、本作品の中で使われている「紳士」という言葉の定義を再確認する必要がある。

まずは、中世末から近代初頭に成立したイギリスの支配階級であるジェントリ(gentry)に属する者という意味で使われる「紳士(gentleman)」という言葉がある。本来は、世襲の爵位を有する少数の貴族と身分上は庶民である大地主層から成る支配階級であったが、時代を経るにつれて、地主以外の上位中産階級に属する「プロフェッション(専門職)」と呼ばれる職種の従事者(高級官吏、政治家、将校、医師、法律家、国教会聖職者、貿易商等)も「ジェントルマン」と呼ばれるようになった。

そして、もう一つが「紳士らしく振る舞う者」を表す言葉としての「ジェントルマン」である。一例を挙げると、「私」がドリッフィールドの伝記を書くのであれば、「洗いざらい全部、美点ばかりではなく汚点もすべて出す方が面白いとは思わないかい?」と提案したことに対して、ロイが「それはやろうたって出来ない。そんなことをしたら、エイミが口を開いてくれなくなる。僕の慎重さを信頼したからこそ、伝記を書いてくれと頼んだのだから。紳士らしく行動しなくてはならない」と答え、「私」が「紳士と作家を両立させるのは困難だよ」と返したときの「紳士」がそれにあたる。(160) ロイは紳士録に名前の載る身であるし、「私」も牧師の甥であることから、二人が紳士階級に属する人間であることは間違いない。(11) しかし、この場面での二人の会話からは、実際に紳士階級の出であるのかどうかにかかわらず、「紳士らしくあること」が出来る者を「ジェン

トルマン」と呼んでいる印象を受ける。

ロウジーがジョージを「完璧な紳士」と評した時、この二つ目の意味で「紳士」という言葉を用いていたのは明らかである。そもそもジョージは裕福な商人ではあるものの紳士階級には属しておらず、財力にものを言わせて紳士のような装いを凝らしたり、寄付や公共事業への投資で尊敬を集めようと試みたけれども、階級の壁を超えることは叶わなかったからである。また、保守的なイギリスの田舎町で生まれ育ったロウジーが、階級制度について無知であったとも考え難く、紳士階級とは切り離れた意味で「紳士」という言葉を使ったと捉えるのが自然であろう。

そうすると、今度は「紳士らしく振る舞う」こととは一体どういうことであろうかという疑問が湧いてくる。これについて考えるにあたって、まずは以下のロウの台詞を読んでもらいたい。

先生（筆者注：エドワード）は傑作を全部書いたあとで、エイミと知り合ったのだが、彼女のお蔭で、堂々として威厳のある人物として晩年の二十五年間人々に尊敬されたのだよ。それを否定する者は誰もいない。奥さんは僕には率直に打ち明けてくれたのだが、ずいぶん骨を折ったそうだ。ドリッフィールド老人はとても奇妙な癖があって、紳士らしく振る舞うようにさせるのには、ずいぶん機転を使う必要があったそうだ。（158）

文中の「紳士らしく振る舞うようにさせるのには、ずいぶん機転を使う必要があったそうだ」の部分は、原典では“she had to use a good deal of tact to get him to behave decently”となっている。（*Cakes and Ale* 123）行方昭夫氏によって「紳士らしく振る舞う」と訳された部分は、原典では“to behave decently”となっており、「紳士（gentleman）」という言葉は、実際には使われていないのである。同じ箇所は、上田勤訳では「奥さんはいろいろと機転を利かして、見苦しくないようにさしたそうだ」となっており（90）、厨川圭子氏は「まともにふるまうようにしむけるには、かなり機転をきかさなければならなかったようだ」と訳している。（164）これらを比較すると、上田、厨川訳が直訳的であるのに対して、行方訳は意識の度合いが強いことが分かる。だが、行方が“to behave decently”を「紳士らしく振る舞う」と訳したことは、「紳士らしくあることとは何か？」という問題を考える上で、大きなヒントを与えてくれる。なぜなら、本作品における“to behave decently”とは、エドワード朝イングランドの紳士階級の価値観に沿う形で「見苦しくないように」「まともに」ふるまうことを意味しているからである。

そして、この紳士階級の価値観を実に分かりやすい形で体現していたのが、ブラックスタブル時代、ドリッフィールド夫妻やジョージとの親交を深める前の

「私」であった。

僕自身は周囲の人と同じく、ジョージ殿を軽蔑した。通りで僕を呼び止めて、呼び捨てにして、まるで彼と僕の間社会的地位の差がないような口をきくの許せなかった。息子が大体同い年だったので、一緒にサッカーをやったらいいじゃないか、などと言った。でもその息子は町の学校に通っていたのだから、僕とは身分違いだったのだ。(91)

彼(筆者注:エドワード)は小さな包みを僕の手押し込んだ。汽車は蒸気を上げて動き出した。開けてみると、一枚のトイレット・ペーパーに二枚の半クラウン銀貨がくるんであった。髪の毛の付け根まで赤くなった。小遣いが五シリングも増えたのは嬉しかったが、僕に小遣いを寄越すというような出すぎた失礼に対して、怒りと屈辱を覚えた。(111)

身分の差を常に意識し、お上品ぶって体裁を整えることを最優先する。そして、その体裁の枠から外れようとする相手は徹底的に侮蔑する。それこそが、紳士階級の価値観であり、“to behave decently”もこの価値観を基準に測られているのである。そして、そうした価値観に真っ向から対立したのが、ジョージの旦那であったのだ。

紳士階級は彼(筆者注:ジョージ)を下品だと思い、事実彼は見栄っ張りで自慢好きだった。声が馬鹿でかいのと耳障りな笑い声を誰もが嫌った。通りの向こう側で誰かと喋っていると、こっち側で全部聞き取れた。彼の物腰も批判された。馬鹿に慣れなれしいのだ。紳士階級と話すときでも、自分が商人でないかのような物言いをするので、凶々しいとも言われた。親しみやすい態度や、公共事業での活躍や、毎年のレガッタとか収穫祭への気前のいい寄付や、誰に対しても施す親切などのせいで、ブラックスタブルの住民との垣根がいつか取り払われるだろうと彼が考えていたとしたら、それは誤りだった。皆と仲良くしようという努力は敵意をもって迎えられるだけだった。(89-90)

だからこそ、そんなジョージを「完璧な紳士」と評したロウジーは、紳士階級の間とは全く異なる価値観を有していたに違いない。このことを考えるにあたって、筆者が言及したいもう一人の重要人物がいる。エドワード・ドリッフィールドである。ジョージが「いつだって完璧な紳士」であり、だからこそ彼女が心底好きだった唯一の男になり得たのであったとしたら、最初の夫であるエドワードは「不完全な紳士」であったということになる。だとすると、ジョージとエド

ワードとの間の違いを明らかにすることで、ロウジーの価値観も浮かび上がってくるのではなからうか。

筆者の考えでは、エドワードもある時期までは「完璧な紳士」であったはずだ。それを示唆するのが、ブラックスタブル時代の「私」が彼について、次のように語る場面である。

逆にショックだったのは、テッド・ドリッフィールドが以前ホルボーンで食堂のボーイをやっていたと言うのを、ごく当たり前のことのように語るのを聞いたことだった。(中略) ドリッフィールド夫人も、鉄道紋章亭の前を自転車で通ったとき、ここで女給を三年間やっていたのよ、と誰でもするような当たり前のことのように、さらりと言った。(99-100)

ここで示されているのは、アンソニー・カーティス (Anthony Curtis : 1926-2014) が言うところの“aloof” (気にせず構わず) の姿勢である。

この「^ア気に^ルせず^フ構わず」の姿勢は、世間の道徳を軽蔑することにも通じる。ドリッフィールドが当時の、つまりエドワード朝イングランドの価値観に盲従しなかったことは、しばしば話のなかで、いろいろな形で示されている。その第一は、彼がブラックスタブルで自転車に乗る練習をしているウィリーに会うところである。ウィリーは牧師の甥、したがって紳士階級に属している。ドリッフィールドは生まれの卑しい名もない三文文士だから、いわばまったく柵の外の人間である。だが、彼は、以前に紹介されたことなどなくても、平然として少年に近づいてゆき、彼の面倒を見てやる。第二は、ドリッフィールドとロウジーとが、「夜逃げした」とき、つまり、いっさいの勘定を未払いのまま、ある日ブラックスタブルから姿をくらましてしまった時である。こういうことは、逼迫していたあの時代、労働者階級の者が時たまやることだったが、社会的地位のある人間には考えられないことだった。(Curtis、高見訳 76-7)

自らの出自や経歴や階級を一切気にすることなく人と接し、社会的に咎められる行為を行っても平然としていられる姿勢は、作中でロウジーがしばしば見せているものであるし、それは、ジョージの行動原則でもある。いわば、この三人は似たもの同士であり、同時に、紳士階級に代表されるエドワード朝イングランドの価値観に盲従した人々を相手に戦う「同志」であった。

しかし、エドワードとジョージとの間には大きな違いが一つあった。それは、エドワードが「作家」であったということである。

エドワードの「気にせず構わず」の姿勢を示すもう一つの顕著な例として、彼

の後期の小説『生命の盃』にまつわるエピソードがある。この作品には、発表当時に酷評された、子供の死とその後の「奇妙な出来事」が描かれている。それは、子供を失った主人公の妻が、いたたまれなくなって街をさまよった挙句、見知らぬ男と一夜を過ごすといった非常識な行動である。そして、後に「私」は、この出来事がほぼ事実であったことをロウジー本人から告げられるのである。

この経緯はこうである。二人の幼い娘が脳膜炎を患い死亡したとき、ロウジーは悲しみを紛らわせるために、喜劇役者のハリー・レットフォード (Harry Redford) と一夜を過ごす。彼女は夫に、あの夜自分がハリーと一緒にいたことを何一つ打ち明けなかったのだが、エドワードは、このことをモチーフにしたエピソードを小説の中に書き、その内容が事実とほとんど差が無かったため、彼女は彼の洞察力に驚かされる。さらにロウジーは、彼が娘の死と妻の不貞という二つの大きな衝撃を一度に受けたのにもかかわらず、何食わぬ顔で、耐え難いはずの体験を小説に書いたことにも、少なからずショックを受ける。

「彼がああ晩わたしのしたことを大体分かっていたのを知って、ぎょっとしたわ。参ったのは、そんなことを本に書いたという点ね。本に書くようなことじゃあないもの。作家って奇妙な人種ねえ」(『お菓子とビール』305)

だが、自らも作家である「私」には、エドワードの行動の背後にあったものが手に取るように理解出来たのである。それは、自らの苦悩に向き合い、作品の中に書き込むことによって、苦悩を昇華させようとする作家の姿であった。

要するにいかなる感情でもいかなる苦しみでも、それを文章に書いてしまつて、物語の主題やエッセイの添え物として活用しさえすれば、すっかり全部忘れられる。自由人と呼べるのは作家だけである。(306)

このように作家というものは、人生が自らに差し出すものがどのようなものであっても、利用してはばからない。それゆえに、自由であると同時に孤独な存在なのである。先程、筆者はエドワード、ロウジー、ジョージの三人は「同志であった」と書いたが、同じ敵を相手に同じ戦場で戦ってはいたものの、作家・エドワード・ドリッフィールドの孤高の精神を他の二人が理解するには至らなかったし、そもそも理解を試みた形跡すらないのである。そして、この「作家であること」こそが、ロウジーとエドワードの間に溝を生み出し、最終的に彼が「完璧な紳士」になり得なかった最大の要因となったのである。

V

筆者は「エドワードもある時期までは『完璧な紳士』であったはずだ」と前述したが、この「ある時期」とは、彼がバートン・トラッフォード夫人によって見出されたタイミングであったと考える。それまでも、作家・エドワードがロウジーを含む周囲の人間を撥ね付け、孤独の戦いに身を投じることは当然のごとくあった。(彼は夜間に執筆することを好んだので、何もすることのないロウジーは、夜な夜な男たちと遊びに出かけていた)しかし、作家であることから離れると、彼は再び陽気さとおふざけと遊びと不道德に満ちた夫婦生活へと戻ってきたのである。しかし、トラッフォード夫人が本腰を入れてエドワードを後押しすることを決めると、日常の中で彼が作家でいる時間が大幅に増えたのである。夫人は彼を出版界に影響のある人物が集う昼食会へと引っ張り出し、時には、彼女から散歩に誘い文学談義を交わすこともあった。(197)

これに強く反発したのがロウジーであった。彼女はトラッフォード夫人を毛嫌いし、普段は決して口汚い物言いをしなかった彼女が、夫人のことだけは「あのいけすかない老いばれ狸め!」と言い放ったのである。(198)「私」は、白々しく「不思議なことに・・・」などととぼけているが、トラッフォード夫人がエドワードの中にいる作家を完全に目覚めさせてしまうのではないかということに対する危機感が、ロウジーにこのような態度を取らせたのは明らかである。また、後述するが、勘の鋭い彼女が、トラッフォード夫人の背後に紳士階級のそれと共通するお上品ぶった体裁を感じ取ったこともあったはずだ。⁽¹⁾この後、ロウジーの男遊びはより激しいものとなり、ついには「私」とも関係を持つに至るのである。この間、エドワードは、編集の仕事で昼間の時間は埋まり、夜は自作で忙しく、土曜日のサロンでは愛想よく、皮肉交じりの面白い冗談を飛ばすこともあったが、「ブラックスタブル時代と比べると彼はつんと澄まし気味の気がしてならなかった」(233) 部外者である「私」ですら、ここまで感じ取ることが出来たのであるから、ロウジーが夫に対して抱いた違和感は相当に大きいものであったはずである。

そして、いよいよロウジーは出奔することになるのだが、この事件が起こったのが『生命の盃』が出版された約半年後という点には注目すべきであろう。前述した通り、夫婦の間に実際に起こった悲劇をもとにこの小説は書かれたのだが、これを読んだ時にロウジーは、エドワードの作家としての本性を目の当たりにした気持ちになったのではなからうか。そんなエドワードと生活を共にし、彼とともに人生を歩んでいくということは、『生命の盃』で起きたことが今後も繰り返されることを意味していた。それはすなわち、彼女の人生が、彼の人生の苦悩の昇華のために、作品の中で利用される可能性があるということである。さらに、

トラッフォード夫人に取り込まれつつあるエドワードが、以前の「同志」としての彼とはすでに別人で、むしろ「向こう側」の住民になりつつあることも予見していたのであろう。

そこに飛び込んできたのが、すべてに失敗して一文無しになったジョージであった。これをロウジーは、千載一遇の好機と捉えたに違いない。彼は、夫と知り合う前から付き合っていた男で、愛情はあったが既婚者であったために結婚を望むべくもない相手であった。それがすべてを失い「で、アメリカに行くんだが、一緒に来ないか」と声をかけてくれたのだ。(307) 彼女の人生を利用し、エスタブリッシュメントの側に自らの居場所を求め始めた「作家」との生活に未来を見出すことが出来ないロウジーにとっては、相も変わらず破天荒でいい加減ではあるものの、決してブレることなく陽気さとおふざけと遊びと不道徳に満ちた生活を与えてくれるであろう男の腕に自らを委ねる決断は、自然なものであったに違いない。

VI

ロウジーに捨てられた後、エドワードはトラッフォード夫人の手中に完全に落ちてしまう。彼女は傷心の彼をやや強引に自邸に引き取り、その後一年近くも滞在させた。それから、彼をイタリアへと連れていき、ラスキン (John Ruskin : 1819-1900) を手引きにイタリア芸術の不滅の美を指南した。帰国後は、ロンドン市内に住居を見つけてやり、そこで彼の名声が高まるにつれて慕ってくる人々のために昼食会を開き、女主人の役割を果たしたりもした。エドワードがイギリス小説の巨匠の一人として評価されるべきだと主張する論文を『四季評論』(*The Quarterly*)⁽²⁾に寄稿するように夫に促したり、文芸界に影響のある人物を自宅での夜会に招待したりと、ありとあらゆる手段を講じてエドワードの宣伝係を務め、彼が常に世間の目に触れているように心を砕いたのである。(256) 彼の名声確立したのは、すでに執筆をしなくなった晩年のことであったが、その基盤を作ったのがトラッフォード夫人であった。

この間、エドワードは、ほぼ彼女の言いなりであったが、たった一度だけ抵抗を試みたことがあった。それがエミリーとの結婚である。しかし、トラッフォード夫人が予想に反して二人の結婚を素直に受け入れ祝福したことで、彼は彼女には到底敵わないと悟るのである。さらに、夫人のお眼鏡にかなった後妻のエミリーが、彼女の遺志を引き継ぐ形でエドワードのプロデュースをさらに推し進めるようになる。前述した通り、エイミーはエドワードに「紳士らしく振る舞うように」させ、ブラックスタブルの自宅を「文豪」の住みかとしてふさわしいものへと仕立て上げたのであった。

再婚後のエドワードは、プロデューサー二人の思惑通りに文壇での名声をます

ます高めていくのだが、それに反して彼の筆は止まってしまう、一作たりともまともな作品を残せなくなってしまう。エドワードは作家であるのだから、本来であれば、こうした状況でさえも利用して優れた作品を書けるはずである。それが出来なかったのは、彼がロウジーという同志でありミュージズでもあった女性を失ったことが原因であろう。つまり、ロウジーは作家エドワード・ドリッフィールドのインスピレーションの源泉であったのである。

ところが、そのロウジーとは言えば、エドワードが作家としての本性を見せ、最愛の子供の死という夫婦にとって耐えがたい出来事ですら作品の題材として利用したことを理解出来なかったし、彼が名声を高めれば高めるほど、紳士階級の価値観に染まっていくことにも我慢ならなかったのである。繰り返しになるが、エドワードが、彼女にとっての「完璧な紳士」に成れなかった所以である。

VII

『お菓子とビール』という題名は、シェイクスピア (William Shakespeare : 1564-1616) の『十二夜』 (*Twelfth Night*) の登場人物サー・トービー・ベルチ (Sir Toby Belch) の台詞「たかが執事のくせに、お前さんがお上品ぶっているからといって、こっちまでお菓子やビールをやっちゃいけねえってのかい？」 (“Art any more than a steward? Dost thou think because thou art virtuous there shall be no more cakes and ale?” 第二幕、第三場 翻訳は筆者) に由来している。そして、このサー・トービーがジョージの旦那のモデルになっていることは、多くのモーム研究家によって指摘されていることである。劇中、サー・トービーを代表とする陽気さとおふざけと遊びと不道徳を体現する仲間たちは、聡明で魅力的な女中マライア (Maria) の周囲に集まり、お上品ぶった体裁派で慇懃無礼な執事マルヴォリオ (Malvolio) を出し抜くのであるが、その姿は『お菓子とビール』の中で、ロウジーを中心に、ブラックスタブルの紳士階級の価値観に背く形で芸術と音楽と酒を愛でていたジョージ、エドワード、副牧師のギャロウェイ (Galloway)、そして「私」たちに重なる。マライアがロウジーで、ジョージがサー・トービーであれば、さしずめ単純なギャロウェイはアンドルー (Sir Andrew Aguecheek)、冷静な「私」はフェービアン (Fabian) で、底知れない部分のあるエドワードは道化のフェステ (Feste) に置き換えることが出来るのではなからうか。

しかし、ロウジーが去った後のエドワードは、道化さながらに愚者を演じるようになる。ただし、その時彼が身に纏っていたのは、まだら模様のコートやロバの耳ではなく「文豪ドリッフィールド」としての姿であった。そんな彼が本来の自分に戻り、「真実」を口にすることが出来る唯一の場所が、地元のバー「熊と鍵亭」 (Bear and Key) であった。そこでは、彼はカウンターに席に座り、足を

足台に乗せ、エイミーに家に連れ戻されるまで、誰とも分け隔てなく会話を楽しんだのであった。(264-5) また、晩年、「私」と再会したエドワードが意味ありげにウインクをする有名な場面があるが、これもかつての仲間であった「私」に、彼が道化的仮面の下から一瞬だけ真の姿を垣間見せたということであろう。(65、68)

以上のように、トラッフォード夫人とエミリーによって懐柔されてしまったエドワードをジョージの旦那と対比させることで、ロウジーにとっての「完璧な紳士」像が明らかになるのである。それは、「紳士」という言葉に集約される、お上品ぶった体裁派が示すスノビズムや道徳的態度に対して、陽気さとおふざけと遊びと不道徳から生まれる生命力で以て対峙し続けられる人間のことである。そして、そうした態度を最初から最後まで貫き通したのがジョージであった。

彼の死について、ロウジーは次のように振り返っている。「大打撃だったわ。あんないい夫はいませんから。結婚したときから亡くなる日までわたしが嫌がることを一度も言わなかったんですよ。遺産もたっぷり残してくれました」(292) わざわざ遺産について触れているところが、いかにもロウジーであるのだが、そうした自らの金銭欲を隠そうともしない彼女の眼には、同じく欲望に正直に生きたジョージは「完璧な紳士」であったに違いないのである。

* 本稿における *Cakes and Ale* からの引用文の訳については、1979年に出版された Heinemann の *The Collected Edition* や別版の原典を参照した上で、2011年に岩波文庫から刊行された行方昭夫氏による新訳『お菓子とビール』を参考にさせていただき、引用箇所についても行方訳のページを示すことにした。

注

- (1) 後年、「私」と再会したロウジーが「ミセス・バートン・トラッフォードと結婚するのだろうか」といつも思っていたの」と語っていることから、女性としての嫉妬心も当然あったとは思えるが、彼女が夫人を嫌った本質的な理由ではないと考えここでは割愛した。
- (2) *The Quarterly Review* のことを指していると思われる。

参考文献

- Calder, Robert. *Willie : The Life of W. Somerset Maugham*. London : Heinemann, 1989.
- Cordell, Richard A. *Somerset Maugham : A Biographical and Critical Study*. London : Heinemann, 1961.
- _____. *William Somerset Maugham*. New York : Thomas Nelson and Sons, 1937.
- Curtis, Anthony and John Whitehead, eds. *W. Somerset Maugham : The Critical Heritage*. London : Routledge & Kegan Paul, 1987.
- Hastings, Selina. *The Secret Lives of Somerset Maugham*. London : John Murray, 2009.

- Maugham, William Somerset. *A Writer's Notebook*. London : Heinemann, 1949.
- _____. *Cakes and Ale or The Skelton in the Cupboard*. London : Heinemann, 1954.
- _____. *Cakes and Ale or The Skelton in the Cupboard*. The Collected Edition. London : Heinemann, 1979.
- Morgan, Ted. *Maugham*. New York : Simon and Schuster, 1980.
- Shakespeare, William. "Twelfth Night, or, What You Will." *The Complete Pelican Shakespeare*. New York : Viking Penguin, 1977.
- 上田 勤 「お菓子と麦酒」 中野好夫 編 『サマセット・モーム研究』 英宝社、1954年。
- 越川正三 『サマセット・モームの小説群』 関西大学出版部、1985年。
- 越川正三 『サマセット・モームの全小説』 南雲堂、1972年。
- 越川正三 『サマセット・モームの文学』 二玄社、1966年。
- 相良次郎 『モームの世界』 英米文学シリーズ12 評論社、1977年。
- 高見幸郎 著訳 『サマセット・モーム』 講座・イギリス文学作品論・第十二巻 英潮社、1977年。
- 行方昭夫 『モーム語録』 岩波文庫 岩波書店、2010年。
- 行方昭夫 『モームの謎』 岩波現代文庫 岩波書店、2013年。
- 藤井良彦 『サマセット・モームの輪郭』 英宝社、1999年。
- 藤野敬介 『サマセット・モーム「お菓子とビール」研究—ロココの太陽・ロウジー論—』 Walpurgis 2022 國學院大學外国語文化学科紀要、2022年。
- 藤野文雄 『サマセット・モーム「お菓子とビール」の研究—二人の主人公について—』 東洋大学紀要 教養課程篇第27号、1988年。
- 藤野文雄 『W・サマセット・モームの研究—「お菓子とビール」の世間体について—』 東洋大学紀要 教養課程篇第36号、1998年。
- シェイクスピア 『シェイクスピア全集 II』 小田島雄志訳 白水社、1982年。
- W. S. モーム 『お菓子と麦酒』 厨川圭子訳 角川文庫 角川書店、2008年。
- W. S. モーム 『お菓子と麦酒』 上田 勤訳 サマセット・モーム全集7 新潮社、1955年。
- W. S. モーム 『お菓子とビール』 行方昭夫 訳 岩波文庫 岩波書店、2011年。
- ロバート・ロリン・コールドー 『W. サマセット・モームと自由の探求』 北川悌二 訳 北星堂書店、1976年。